

生活科

1 育成したい「思考力」

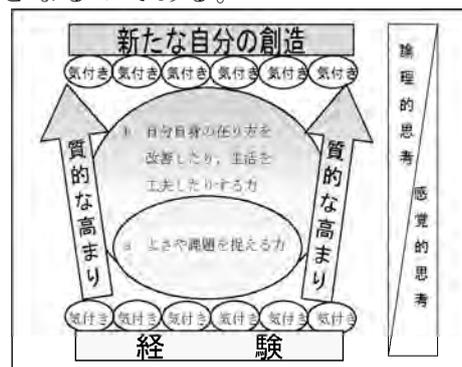
- a これまでの経験と結び付けながら、事象への関わり方についてのよさや課題を捉える力
- b 具体的な活動の中で、これまでの経験や各教科の見方・考え方をを用いて、自分自身の在り方を改善したり、生活を工夫したりする力

生活科の学習は、事象（身近な人々・社会及び自然）に直接働きかける活動を通して、気づきを質的に高め、子どもがこれから生活していく上での自立への基礎を養うことを目指している。

子どもたちは、身近な人々・社会や自然と直接関わる経験をしながら、さまざまなことに気付いていく。そして、そのような経験と事象とを結び付けることで関わり方についてのよさや課題を捉えることができ、それが新たな気づきとなる。また、経験を通して気付いた自分自身の在り方や生活についての課題を、改善したり工夫したりすることで、より気づきが質的に高まっていくのである。このように、自分のよさや可能性に気づき、自己を高めようとするのが、「新たな自分の創造」であり、自立への基礎となるのである。

上記「思考力」には段階があり、気づきを質的に高めていくためには、より直接的で感覚的なaの「思考力」から、より間接的で論理的なbの「思考力」へ移行していくことが必要となる。ただ、aとbの「思考力」は2学年共通のものである。

それぞれの「思考力」の具体的な内容については、以下で紹介する。



a 「事象への関わり方についてのよさや課題を捉える力」

aの「思考力」は、自分を取り巻く事象が自分自身にとってどのような意義があるのか、これまでの自分の経験を基にそれに対する関わり方のよさを捉えたり、事象への関わり方について、今、解決しなければならない問題とは何かを捉えたりすることである。そして、これまでの関わりをもう一度見直し、これからどのようなことをしたいのか等、新たな目当てを見つける力である。以下に実践例を紹介する。

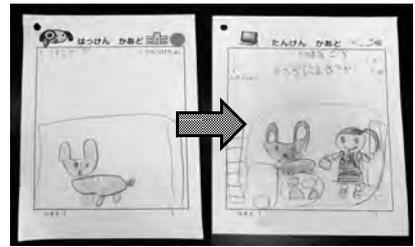
第1学年「だいすき ふぞくしょうがっこう」

【本単元で育成したい「思考力」】

これまでの経験と学校探検で出会ったひと・もの・ことを結び付けながら、学校での生活のしかたを知り、学校で自分がしてみたいことを見いだす力

本実践では、1年生が学校のことを詳しく知り、学校生活に慣れるために、学校探検を3回行った。それらの過程で、例えば「家では犬を世話しているから、学校でもうさぎを触ったり、世話したりしたいな。」や「図書室には家よりもたくさん本があるから、いろいろな本を借りて読みたいな。」等と、日常生活におけるこれまでの経験と学校探検で出会っ

たひと・もの・ことを結び付けながら、学校生活について理解を深めていった。探検後の交流では、「体育館にバスケットゴールがあったよ。」等と、気付いたこと発表した。そして、次の活動への意欲が高まり「昼休みに、体育館で友達とバスケットボールがしたい。」等と、自分が学校でしてみたいことをより具体的に見いだしていった。



【発見からしたいことを考える】

b 「自分自身の在り方を改善したり、生活を工夫したりする力」

bの「思考力」は、これまでの経験や各教科で学んだ見方・考え方をを用いて、課題解決に向けてよりよい方向を模索したり、これまでの取り組みを振り返ってやり直したりする等、これからの新たな行動を工夫する力である。

子どもたちはさまざまな問題に直面した時、これまでの自分の経験に照らし合わせて解決の方法を探ろうとする。問題解決に結び付いた要因を探ったり、要因が複数ある場合にはそれらを比較したりして、改善や工夫のしかたを見いだしていく。

また、各教科の見方・考え方をを用いて、自分の生活を工夫することも大切である。例えば、楽しかったことや気付いたこと等を表現する際には、友達や家族、年少者や高齢者等、誰にどんなことを伝えるかを意識して考える場を設けることで、国語科での学習を生かして相手に応じた表現方法の工夫を考えることができるようになる。加えて、生活科が学びの対象とする事象の中には、算数的な要素を含んだ事象（時間や時刻、買い物等）や図画工画的な要素を含んだ事象（おもちゃづくり等）がある。

それぞれの教科を通して学んだ見方・考え方をを用いることで、自分自身の在り方を改善したり、生活を工夫したりすることができるのである。以下に実践例を紹介する。

第2学年「生きもの大すき」

【本単元で育成したい「思考力」】

生き物を飼育する活動の中で、これまでの失敗・成功経験を基にして、自分が飼育している生き物への関わり方を工夫する力

本実践では、子どもたちが飼育している生き物が、いつまでも元気でいられるようにするための世話のしかたを考えていった。子どもたちは、これまでの経験から住みかと餌に気をつける必要があることは捉えていた。そこで、それぞれの生き物を捕まえてきた場所を写真を用いて想起することで、住みかは、その生き物が元いた場所に近い環境にすればよいことに気付き、世話のしかたをより具体的に考えていった。また、餌をやり過ぎたときに水槽の水が汚れ、生き物の元気がなくなったという経験を振り返り、餌のやり方も工夫するとよいことに気付いていった。このように、経験を基に住みかや餌に関する世話のしかたを具体的に考えた。その後、同じ生き物を飼育している友達と世話のしかたについて交流することで、よりよい世話のしかたの工夫を見だし、日々の飼育活動の中で実践していった。



【生き物の住みかを考える】